

湘南の由来とエリアを探る

その 14

湘南発祥の地/大磯-4

考証「鳴立沢の歌」

和田精二

湘南遺産プロジェクト HP

14-1 はじめに

湘南の由来について大磯 1,2,3 で説明しましたが、読み返して見ると、本シリーズの肝心要の部分にあたる「鳴立沢の歌」（心なきに身にもあはれは・・・）を、西行が「いつ」「どこで」詠んだのかという疑問に対する結論を曖昧模糊にしておいたことが気になりだしました。私自身が調べた範囲では、このテーマは歴史学者の興味の対象としてはプライオリティが低いようで、核心をついてくれる記述が見当たりません。



それならば、この機会に「鳴立沢の歌」に的を絞り、腰を据えて史実に迫ってみようかという気分になりました。ただし、歴史分野に対してはまるで門外漢ですので、調査対象を星の数ほどある西行に関する研究文献にせず、近隣図書館の蔵書に限りしました。理由は私の能力の欠如にありますが、一方で湘南地域の図書館の蔵書でも一定の成果が期待されるはずであるという直感もありました。さて、作業の結果ですが、誤解と短見に満ちた結論の可能性もありますが、本テーマに関する関連情報の整理整頓位は出来たかなと思っています。本テーマに興味のある方だけでも目を通していただければ有難いです。文字数が多いため、最初に summary を掲げておきます。

14-2 「鳴立沢の歌」の結論

summary

西行は「鳴立沢の歌」をいつ、どこで詠んだか？

西行は自身の詠じた歌以外に行動記録を残さなかったため、没後も衰えない人気に乗って「西行物語」や「撰集抄」が創作され、史実と異なる西行伝説・伝承の世界が形成された。「鳴立沢の歌」もその事例のひとつである。

西行は生涯に2度 陸奥（みちのく）の旅をしているが、「鳴立沢の歌」は初回（26～30 歳頃）の旅の途上で湘南に立ち寄り、歌の発想を得たものと思われる。ただし 湘南で詠んだのか、陸奥旅の後、都近くの庵に戻ってから詠んだのかについては判断できない。



発想を得た場所は、能因法師の足跡を辿り、歌枕の地を訪れることが初回の旅の目的であったので、湘南における歌枕の地として知られた「こゆるぎの浜」周辺と思われる。それが、現在の鳴立沢辺りなのか、鵜沼海岸辺りなのかについても判断する材料が無い。

西行が初めて湘南を訪れたとき、「鳴立沢」という歌枕の地は存在せず、「鳴立沢」が歌枕の地となったのは、西行没後の崇雪・三千風による西行追慕の諸活動以降である。

14-3 西行「鳴立沢の歌」の要点

以下、上記の結論に至った経緯を述べていきます。考察を進める上で、西行が詠んだ「鳴立沢の歌」とは一体どのような歌として認識されて来たのかを、整理しておきます。

西行「鳴立沢の歌」の定義



- 1, 平安時代に西行が詠んだ歌である。
- 2, 「鳴立庵の歌」とその解釈の1例
 - 和歌
「心なき身にもあはれは知られけり鳴立沢の秋の夕暮れ」
 - 解釈の1例
「ものあわれを解しないわたしのような身にも、この趣にはしみじみと心うたれるなあ。鳴が飛び立つ沢の夕暮れ時の……」久保田淳「新古今和歌集上」新潮社
- 3, 「山家集」470に収められている。詞書は「秋、ものへまかりける道にて」である。
- 4, 新古今和歌集の巻第4秋歌上に収められているが、西行を中心に寂蓮と定家の「秋の夕暮」の歌が並んでいて、この3首は、「三夕（さんせき）の歌」と呼ばれた。西行の歌は新古今に選ばれる前から有名で寂蓮も定家もそれを下敷きにしたとされている。

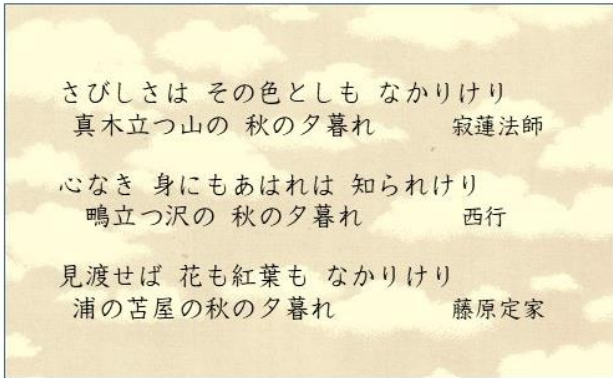


図1 三夕の歌 新古今和歌集にこの3首が並んでいる

- 5, 別種の家集「西行法師家集」に収められている。詞書は「鳴」のみである。
- 6, 「千載和歌集撰集」の撰者・藤原俊成は、西行の歌18首を選んだが「鳴立沢の歌」を選ばなかったため、陸奥旅中の西行が大いに落胆したと「今物語」や「井蛙抄」に記されている。
- 7, 「西行物語」には、西行が相模国大庭郡砥上が原でこの歌を詠んだと記されている。
- 8, 室町時代の僧道興の紀行文「廻国雑記」の大磯の箇所には西行が鳴立沢を訪れたことが住民に伝承されていると記

されている。

- 9, 江戸時代、塙保己一は「群書類従」に「廻国雑記」の上記の部分引用した。

14-4 「鳴立沢の歌」の記述事例の一覧

今回の調査で探し出すことが出来た「鳴立沢の歌」について記述した15の文例を文献の発行順に列記します。

■例1 関水華「神奈川県史跡名勝天然記念物調査報告書」 神奈川県教育委員会事務局 1950（昭和25）

西行法師旧跡の地として、言い伝えられている大磯鳴立庵は、そのことより、寛文の始め小田原の崇雪が創堂し、三千風が入庵してより現在18世の庵主が、ともかく俳諧道場として守りつづけて来たことに私はより多くの興味を覚える。しかし現在まで、このことについて1つの纏まったものが私の知る限りに於いては無いので一応纏めて見たいと筆を進めた。（略）

この鳴立沢は、西行法師が東遊の折、「心なき身にも哀れはしられけり 鳴立沢の秋の夕暮れ」と詠んだ処だと云い伝えられていることは今更述べるまでもないが、この歌は「山家集」に「秋ものへまかりける道にて」の詞書と共に載り、新古今和歌集にも入れられている。これは西行が都に在っての詞書と思われる。尤もこの鳴立沢の伝説は、聖護院宮道興准后「回國雑記（文明18年、1486年）に「鳴立沢という所にいたりぬ。西行法師ここにて、心なき身にもあわれと詠ぜしより、此所をかくは名つけるよし。里人語り侍りければ、「あはれなる人の昔を思ひいでて 鳴立沢をなくなくそとふ」とあり、又信を置くに足らないまでも、「西行物語」に「相模国大庭という所、砥上が原をすぐるに……其の夕暮かたに沢辺の鳴とふたつをとしければ」とて、西行の歌を記しているが、室町期には既にこのことが云われて居り、大庭砥上が原は現在藤沢市鵜沼の辺を指してはいる、とも角、海岸寄りの老松篠篁、沢をめぐらして景勝の名所であったことは後の広重画く鳴立沢を見なくとも想像に難くない。しかも後述の三千風が入庵し、鳴立沢の宣伝にこれつとめたことなど、一層これに拍車をかけている。



■例2 大磯町文化史編纂委員会編「大磯町文化史」大磯町教育委員会 1956（昭和31）

この大磯町の鳴立沢と西行の詠んだ鳴立沢については種々の異論のあるところであるが、聖護院宮道興准後の「回國雜記」によれば「鳴立沢という所に至りぬ、西行法師ここにて「心なき身にも哀れ」と詠ぜしより、此所をかくは名づける由」里人語り侍りければ、あわれなる人の昔を思ひいでて鳴立沢を泣く泣くぞとふ』とあるので室町時代にはすでに、同一視していたのである。これを三千風が入庵してより更に宣伝したので現在一般の人々は常識的に同一のものとして信じている。大磯における鳴立沢の位置については、始めは現在の地ではなく、現地より上流 2 町程の東小磯字大門辺富士見橋から鳴の井戸付近を指して居たように言われている。

■例3 「大磯」大磯町役場 1968（昭和43）

「心なき身にもあわれは知られけり鳴立沢の秋の夕暮れ」の西行法師の歌は有名で、この鳴立沢については多少の疑義もあるが、大磯の鳴立沢がこの旧蹟であるとの伝承は文明 18 年の廻國雜記によれば「あわれ知る人の昔を思ひいでて鳴立沢をなくぞ問う」とあるように既に室町時代に同一視されている。大磯に於ける鳴立沢の位置は、当初は現在の位置より上流 2 丁程の、富士見橋から鳴の井戸付近を指していたように言われている。

■例4 高橋光「大磯ふるさと紀行」郷土史研究会 1981（昭和56）

68 才の時、東大寺大仏金体の沙金勸進の旅に出て、鎌倉八幡宮にて頼朝にあう途中大磯の鳴立沢（死木立沢）のほとりの鳴立庵に立ち寄られ「心なき身にもあわれは知られけり鳴立沢の秋の夕暮れ」と詠じたと言われている。言い伝えによると、川辺に立ってあった川灌頂に思わず立止りて、人のあわれを感じこの歌を詠じたとも言われている。（略）西行法師が東に下る途次立寄られたと言う鳴立庵は現在の位置より遥かに北であったらしい。当時の官道が御嶽さんの前の道であった事からしても、葦や茅の生い繁っていたさびしい沢辺に鳴立庵がションボリとたたずんでいた事が想像される。文明 18 年（1486）聖護院宮道興准後の「廻國雜記」記事に鳴立沢という所に至りぬ、西行法師ここにて、「心なき身にも哀れ」と詠ぜしより「此所をかく名づける由」、里人語り侍りければ、「あわれなる人の昔を思ひいでて、鳴立沢を泣く泣くぞとふ』

■例5 池田彦三郎「大磯歴史物語」グローリア出版 1981（昭和56）

西行の歌の鳴立沢の位置については古来種々の異論があるが、大磯の人達には約 500 年の昔において既にその鳴立沢は大磯の鳴立沢に固定していた。道興准後の「廻國雜記」に「鳴立沢といふ所に至りぬ。西行法師ここにて心なき身にもあわれは知られけり、と詠ぜしより、此の所をかくは名づくるよし、里人の語り侍りければ、あはれ知る人の昔を思ひ出で鳴立沢をなくぞ問う」とある。その位置は現在の所より上流であったとも言われている。

■例6 高橋光「ふるさと大磯」郷土史研究会 1983（昭和58）

西行法師がお立寄りになったと言う鳴立庵は現在の鳴立庵よりはるかに数町も川上にあつて、庵の附近には塔婆が沢山建っていたので死木立沢とも言われていた。江戸時代に罪人の百叩きの刑場も鳴立沢の下流の川辺の近い処にあつたと言われているので、昔はさびしい処であつたにちがいない。旅人が沢辺を通りかかると、鳴が驚いて竹やぶの中からパッと飛び立つ様子が鳴立沢の名称の起りかと思うとなつかしい思い出が湧いて来る。

■例7 中村安孝「藤沢史跡めぐり」名著出版 1985（昭和60）

熊ノ森神社のそばに風化した碑が建っている。西行の歌碑である。その表面に「芝松のくすのしげみに妻こめてとかみが原に小鹿鳴くなり 西行」と詠める。江戸時代に土地の人により建立されたものであろう。熊ノ森に歌碑が建てられたことについては、「西行物語」に「相模国大場（大庭）と言所、砥上が原を過るに、野草の露の隙より風に誘れ鹿の鳴声聞えければ、芝松の葛のしげみに妻籠て砥上が原に牝鹿鳴くなり」という故事にもとづいていと考えられる。（略）「大場」の地域は、大庭荘・大庭御厨（みくりや）を意味し、鶴沼・辻堂・羽鳥・大庭・藤沢、そして広く六会・茅ヶ崎といった広い地域が含まれていたためである。

■例8 久保田淳「西行の世界」日本放送出版協会 1988（昭和63）

西行の一代記ふうの物語に「西行物語」という作品がある。その 1 本である絵巻物とされたものの詞書では、この歌は次の

ように語られている。「相模国おほぼといふ所、砥上が原を過ぐるに、野原の霧のひまより秋風に誘われ、鹿の鳴く声聞こえければ 糸はまどふ葛の茂みに妻こめて砥上が原にを鹿鳴くなり その夕暮れがたに、沢辺の鳴飛び立つ音しければ、心なき身にもあはれは知られけり鳴立つ沢の秋の夕暮れ」このような記述によって、鳴立沢は現在の神奈川県大磯の海岸近い1地域とされ、それは歌枕として、後世の文人の訪れる場所になっている。けれども西行の家集である「山家集」でこの歌に付されている詞書は、「秋、ものへまかりける道にて」というのであり、別種の家集である「西行法師家集」に至っては、単に「鳴」という題が与えられているのに過ぎない。するとこの作は到底関東下向の長い旅路の途中で詠まれたものとは考えられない。むしろ畿内のどこかにあった自身の庵からちょっと所用があって出掛けた西行が、その途上見た属目の景と考える方が当たっているであろう。「西行物語」という作品には時代錯誤や明白な虚構も存し、その記述をにわか信じることは危険なのである。

■例9 松永伍一「仏教文化選書 西行幻想」佼成出版社
1989（平成1）

「井蛙抄」に「成人云。千載集の比（ころ）、西行在東国けるか、勅撰の事尋けるに、はや披露して御歌も数多入ると云へり。鳴立つ沢の秋の夕暮といふ歌入たりやと問ひければ、見えざりしと答へければ、さては見て要なしとて、これより又東国へ下りけると云」とある。このエピソードが事実裏づけられているかどうか私には判断を下せないが、いかにも西行らしい態度ではないか。「千載和歌集」の選考が藤原俊成によって進められることをきいた西行は、「御裳濯河歌合（みもすがわうたあわせ）」の詠歌を事前に送り届け、それに判を乞うた。未来にわたって自作が遺るためにはこの事前運動しか方法はない。都に住んでいれば情報も多くはいるし、こんな手間をかけずにすむのだが、

「左」おほかたの露には何のなるならん袂に置くは涙なりけり
「右」心なき身にもあはれは知られけり鳴立つ沢の秋の夕暮れ

この第18番について俊成は「鳴立つ沢のといへる、心幽玄に、姿および難し。ただし左の歌は、何のといへる詞、浅きに似て心殊に深し。勝と申すべし」と判を加えている。「左」は「千載和歌集」に採られ、「右」は落とされた。西行はそのことに失望したというのが「井蛙集」のエピソードである。

■例10 高橋光「ふるさと大磯探訪」郷土史研究会 1991
（平成3）

西行法師がお立ち寄りになったと言う鳴立庵は、現在の鳴立庵よりはるか数町も川上にあつて、庵の附近には塔婆が沢山建っていたので死木立沢ともいわれていた。江戸時代に罪人の百叩きの刑場も鳴立沢の下流の川辺の近い処にあつたと伝えられているので、昔はさびしい処であつたにちがいない。旅人が沢辺を通りかかると、鳴が驚いて竹やぶの中からパッと飛び立つ様子が鳴立沢の名称の起りかと思うと1人なつかしい思い出が湧いて来る。「心なき身にもあはれは知られけり鳴立つ沢の秋の夕暮れ」鳴立沢（死木立沢）のほとりにたたずみて、西行法師が詠じたと伝えられている。この和歌によって西行を思慕する人が鳴立庵を訪れるようになった。江戸時代の寛文の頃から特に多くなった。（略）東大寺の大仏金体の沙金勸進の旅に出ようと発意し、旅立ったが既に歳は68才で人生の中を過ぎていた。東に下つて鎌倉にて頼朝公に面会しようとした途次に大磯の鳴立庵に一夜の宿をとられている。そのお姿が旅衣に右ひざを立て、両手でひざをかかえている文学上人鉦造りの像が、円位堂の中に安置されている。

■例11 榎野尚一「西行を歩く」PHP研究所 1997
（平成9）

（三夕の歌は）3首とも秋の黄昏を詠んだ歌で、西行のは現在の神奈川県大磯から鶴沼までの途中で詠んだといわれているが、「西行物語」では「相模国大庭といふ所、砥上が原で」となっている。鶴沼は現在藤沢市で、昔は砥上が原といわれていて、いまの湘南海岸地区である。大磯に鳴立庵があるが、これは後世に建てられたものである。鶴沼から北の方に大庭という地名が現存しているが、さて、ここかどうか判断できない。

■例12 小市和雄「西行関係史跡事典/西行のすべて」新人物往来社 1999（平成11）

西行が詠んだ「鳴立沢」は特定の地点を指す固有名詞ではない。「西行物語」では、相模国大庭の砥上原（現在の神奈川県藤沢市鶴沼）としている。鳴立庵の「鳴立沢」は伝説的に作り出されたものとする説が強い。鳴立庵前の国道1号線は、近世の京鎌倉往還道と一致するかどうかは不明であり、西行がこの道を通ったのかも不明である。

■例 13 出張千秋 「西行伝説/わが住む里第49号」 藤沢市総合市民図書館 2000（平成 12）

西行の伝説を記した西行物語（正保3年版本）は、西行が砥上原の辺りで次のような歌を詠んだと記している。相模国大庭といふ所、砥上原を過ぐるに、野原の霧の隙より、風に誘われ、鹿の鳴く声聞えければ、「えは迷ふ葛の繁みに妻篋めて砥上原に雄鹿鳴くなり」その夕方に、沢辺の嶋、飛び立つ音しければ、「心なき身にもあはれは知られけり嶋立沢の秋の夕暮れ」砥上原は、中世は土甘郷のうち南部の片瀬川右岸の原野をいい、土甘郷即砥上原ではなかった。（略）山家集の嶋立沢の歌の詞書に「あき、ものへまかりけるみちにて」とあるように、「嶋立つ沢」は、始めは名もなき場所、すなわち不特定の場所であった。西行物語の著者もその場所を特定していない。しかし、砥上原の鹿の歌の次にこの歌を置いたため、鎌倉へ行く道順からすると、嶋立つ沢は鵜沼付近あるいは片瀬川のほとりかとも読み取れることとなった。

■例 14 高津茂 「海から見た大磯の歴史 / 大磯学」創森社 2013（平成 25）

西行が2度目の奥州への旅を行ったのは1186（文治2）年69歳の時である。その旅の途中に「心なき身にもあわれは知られけり嶋立沢の秋の夕暮れ」を詠んだとされ、嶋立庵の名はこの歌に縁るといってもよい。1664（寛文4）年に西行のこの歌の面影を残すこの地に標石が立てられ、1695（元禄8）年5月に紀行家であり俳諧師であった大淀三千風が入庵し、西行の法名円位をとって円位堂等のお堂が建てられた。

■例 15 伊藤嘉一「大磯の風土と文化 / 大磯学」創森社 2013（平成 25）

西行は1186（文治2）年、2度目の奥州行を決心する。かれは4年後（文治6年）に73歳で亡くなっていることから晩年の作である。後世「西行物語」の記述から帰路相模の国大磯での歌とされ、大磯嶋立沢の名所が生まれた。しかし、「嶋立庵」は現在の場所ではなく、数丁も川上で庵の附近にはたくさん塔婆が立っていて「死木立沢」と呼ばれたという。



14-5 「嶋立沢の歌」の記述事例の分析

15の文例から見出し得るのは、①同じ内容を扱っても地域によって落としどころが違って来ること、②時間の経過によっても違って来ること、③事例の中で最も古い関氏の報告書から引用したと思われる記述が少なくないこと、④最近の文献でも内容的にばらついていること、などです。

上述したように、関水華氏の報告書「県史跡名勝天然記念物調査報告書」からの引用が多いようですが、念のため、その要点を列記しておきます。

- 1) 「西行物語」によれば、西行が訪れたとされる場所は「大庭の砥上が原辺り（現在の藤沢市鵜沼辺り）」とされているが情報の信憑性は低い。
- 2) 僧の道興が「廻国雑記」に、室町時代には西行の大磯来訪が西行伝承として定着していたことを記している。
- 3) 西行がこの歌の詞書を書いたのは都周辺と思われる。また、嶋立沢とは具体的な場所を示す固有名詞ではない。

さて、西行が「嶋立沢の歌」を詠んだ時期について、西行が68～69歳の時期とする記述が4例（例4, 9, 13, 14）ありますが、この説は適切ではない様に思えます。理由は後述します。また、西行が歌を詠んだとされる場所に関しては2つの説に分かれます。

事例 NO.	西行が歌を詠んだとされる場所	出典
2, 3, 4, 5, 6, 10	大磯の嶋立沢 （嶋立庵とする説もあり）	廻国雑記
1, 7, 8, 11, 12, 13, 15	大庭郡砥上原辺り （藤沢説と大磯説に分れる）	西行物語
1, 8	京周辺（高野山と思われる）	

一方、西行が歌を詠んだとされる場所を、湘南ではなく都周辺の西行の草庵近くとする説が3例（例1, 8, 11）ありますので、念のために湘南としない理由を再度掲げておきます。

事例 NO.	詠んだ場所を湘南としない理由
1,	この歌は「山家集」に「秋ものへまかりける道にて」の詞書と共に載り、新古今和歌集にも入れられている。これは西行が都に在ったの詞書と思われ、西行

	の詠んだ鳴立沢は固有名詞のそれではないとされている。
8,	するとこの作は到底関東下向の長い旅路の途中で詠まれたものとは考えられない。むしろ畿内のどこかにあった自身の庵からちょっと所用があって出掛けた西行が、その途上見た属目の景と考える方が当たっているのであろう。
12	西行が詠んだ「鳴立沢」は特定の地点を指す固有名詞ではない。「西行物語」では、相模国大庭の砥上原（現在の神奈川県藤沢市鵜沼）としている。鳴立庵の「鳴立沢」は伝説的に作り出されたものとする説が強い。鳴立庵前の国道1号線は、近世の京鎌倉往還道と一致するかどうかは不明であり、西行がこの道を通ったのかも不明である。

14-6 西行研究はどの様に行われて来たか？

前項で「鳴立沢の歌」記述例の分類を試みましたが、さらに考察を進める上で、西行に関わる学術界の研究成果について確認しておく必要があるため、歴史学と国文学がどの様に西行に関わる研究を推進してきたのか調べてみました。西行の伝説・伝承についての研究史はすでに層が厚く、柳田国男の「西行橋」をはじめとする民俗学的研究、永井義憲の「西行伝説の変容と伝播」などの国文学からのアプローチがあり、目崎徳衛の「西行の思想史的研究」および「西行（人物叢書）」では、それぞれ「入滅と西行伝説」「没後の事ども」でこの問題を扱っています。近年では花部英雄の労作「西行伝承の世界」が詳細を極めているのが注目されます。

「西行研究」の流れ



- 1, 明治末に西行に関わる近代的研究が開始された。
- 2, 明治38年、梅沢精一が「西行法師伝」で「西行物語」の虚構性を指摘した。
続いて、藤岡作太郎を先頭とした近代国文学の諸研究によって、中世以降の民衆が親しんで来た伝統的西行法師像を描いた「西行物語」「撰集抄」が学問的に強く否定された。
- 3, このため、西行研究が作品の解釈や鑑賞を中心とするよ

うになり、西行研究を国文学や歌壇の領域に閉じ込める傾向をますます強めた。

- 4, 柳田国男が「西行橋」を発表し、民俗学的研究法で西行伝説や西行伝承に先鞭をつけた。
- 5, 昭和に入っても、国文学者や実作者が歌人としての西行を研究する傾向が続いたが、五来重が西行を典型的な初期の高野聖型人物とする説を発表、それまでの研究姿勢に一石を投じた。五来が「聖（ひじり）」としての修行が西行の人生で、歌は副産物と断定したため、石田吉貞等が五来の世俗的、職業的な勸進聖論に強く反発した。
- 6, 石田以降、歴史研究者と文学者による論争が活発化したが、その後、倫理学、哲学、仏教学等の領域に西行研究が拡大した。
- 7, 目崎徳衛が「西行の思想史的研究」を発表。西行を論じるには、宗教・政治・文学・芸能・故実等からの多面的な考察が必要と主張した。
- 8, 川田順が西行の出家の原因について、一般厭世説・恋愛原因説・政治原因説・総合原因説を発表した。
- 9, 1996年、花部英雄が「西行伝承の世界」を発表した。
- 10, 1996年、西行伝承研究会が発足した。
- 11, 2009年、西行伝承研究会の発展的解消を受けて、西行学会が発足。翌年、西行学会編「西行学」が発行された。

以上から、明治末に始まった西行研究の流れの中で、梅沢精一や藤岡作太郎等によって「西行物語」や「撰集抄」が内容の疑わしさを指摘されたことが分かります。民衆が西行伝承として時代を超えて伝えてきた伝説の大半は、西行の死後「西行物語」や「撰集抄」を元に時宗の僧などによって広められてきましたが、それらの内容が否定されると「鳴立沢の歌」の話も拠って立つ基盤を失ったこととなります。そのため、西行が大磯を訪れた説の代替材料として引っ張り出されたのが「廻国雑記」です。しかし、室町時代に西行伝承が地元で定着していたことを訴求するのみでは説得性に欠けるため、現在は崇雪が建立した「鳴立沢の標石」伝承が使われているようです。

それでは西行が鳴立沢又はその周辺を全く訪れないで「鳴立沢の歌」を詠んだのかということ、いささかの不自然さが残ります。そこで「西行物語」や「撰集抄」に依拠せずに、西行がいつ、どこで、「鳴立沢の歌」を詠んだのか、さらに追及してみます。

14-7 いつ、どこで詠んだのか？ 「その1」

いよいよ、西行が、いつ、どこで、「鴨立沢の歌」を詠んだのかという主題の核心に迫ってみようと思います。14-3 項で、例 4,10,14,15 が 69 歳説をとっていたように、一般的には、「鴨立沢の歌」は、西行 2 度目の陸奥旅の際につくられた歌と解釈されることが多いようです。その理由は、「26 歳の西行の歌にしては枯れすぎている」という記述に代表されるように、出家・遁世したばかりの西行がこの様な歌を詠むはずがないという思い込みにあります。この説が適切ではないと考える根拠を以下に述べます。



図2 西行の足跡

西行は、旅から旅へ一生を送った様に伝えられる傾向がありますが、実際に行った旅らしい旅は、陸奥 2 回、北陸 1 回、安芸 1 回、四国 1 回、他に大峯熊野修行などの旅がある程度で、実際は都周辺の草庵に滞在していた時代が長いとされています（高野山 30 年、伊勢 7 年等）。このうち、陸奥行きは 2 回（初回が 26~30 歳頃、2 度目が 69 歳頃）が西行が湘南に立ち寄った旅です。西行が初めて陸奥旅をした時の年齢は、26 歳頃説と 30 歳頃説がありますが特定できません。大事なことは、多少の年齢の差について論争するよりも、若き西行がさいはての地まで修行に赴いた事実や、遁世者の自由を満喫し、数寄のわざに熱中していた事実なのだとして強調する目崎は、初回の陸奥旅の目的について、以下の様に述べています。

『臼田昭吾氏の前掲論文は、この見地からして注目すべき成

果である。（略）そして陸奥の旅の所産であることが確実な作品を詳細に検討した上で、西行の関心が仏道修行よりも、古歌や歌枕にあったこと、能因を追慕する情が唯ならぬものであったこと、作歌の際に踏まえた作品は、すべて実際に陸奥を旅した人たちの歌ばかりであることなどを指摘し、西行のこの旅の目的が、能因を中心とする先行歌人の跡を追って、陸奥の歌枕を实地に訪ねながら和歌修行する点にあった」ことを明確にされた。私はこの考察に全面的に賛同したい。』

『要するに、初度陸奥行の動機・目的は純粋に歌枕探訪の能因の数寄の実践にあり、仏道修行の意図はまったく見られなかったと言っても過言ではない。私はすでに西行の遁世の主たる原因を能因の数寄の道にふけろうとする志向に求め、遁世初期の京郊の草庵住まいの中心もまた数寄にありと考えた。思うに、そうした数寄の遁世者西行が先達能因を慕って陸奥の歌枕を訪ねようとしたのは、水の流れるように自然の成り行きであったろう。』

さらに目崎は、『西行の「ころなき身にもあはれは知られけり鴨立沢の秋の夕暮れ」が、能因法師の「心あらん人にみせばやつのくにの なにはの浦のはるのけしきを」を踏まえ、意識してつくられた。』と述べています。目崎徳衛「西行の思想史的研究」

能因法師と西行による 2 首の歌の相関について、山木の指摘も引用しておきます。

『「つにくいの難波の春は夢なれや あしの枯葉に風わたるなり」これはよく知られた西行の歌である。古来の注釈は、表現に即しながらも「世の中の盛りも夢ぞと観するよし也」とか「芦の葉の角ぐみ出て若やかなりしも、枯葉に成たるは一睡の夢なり」とか、無常変転の詠嘆と解している。また、「芦の推移は作者の心の推移そのもの」というふうに鑑賞する説もある。そして、諸注いずれも、能因の歌を本歌としてあげてきた。「心あらむ人に見せばやつのくにの なにはわたりの春のけしきを」この本歌については異論はない。しかし、この「春のけしき」から西行の感受したものが、単に芦の芽のつにくむ季節の表現だったというならば、それは再考の余地があるのではないか。また、無常変転の詠嘆に結びつけてしまうのもやや性急に思える。「春のけしき」という句から西行の感受したのものには、伝承的歴史の風景があったのではないだろうか。私は、能因の歌にさらにかさねて、古今和歌集の序に「そへ歌」の例として

引かれる王仁の歌を置いてみたいのである。「なにはづにさくやこの花冬ごもり いまを春へとさくやこの花」 また、能因の「心あらむ人に見せばや」の歌をまさしく裏がえしたような西行の歌「心なき身にもあはれは知られけり 嶋立つ沢の秋の夕曇」も古今集・序の王仁の歌にまつわる仁徳伝承をうけ、文徳・清和伝承をもうけながら、現実の「世」への悲嘆を表現したものであるかーと考えている。』 山木幸一「西行の世界」

目崎氏や山木氏が指摘する様に、西行の「心なき身にもあはれは知られけり」の歌は、間違いなく能因を強く意識して詠んでいます。とすると、能因を追慕して陸奥の「歌枕」の地を巡った西行が、当時の湘南唯一の「歌枕」の地、「こゆるぎの浜」を訪れなかったとは思えません。地形学的に考えても鎌倉古道は「こゆるぎの浜」と高麗山の狭い地形を走っていますから、その可能性は大きいと言えます。以上から、「いつ」「どこで」の落としどころが見えてきたように思えます。

14-8 いつ、どこで詠んだのか？「その2」

以上の論をさらに補強するために、西行が2度目の旅では「嶋立つ沢の歌」を詠んでいないことを示したいと思います。今回の調査でも、2度目の旅では、「小夜の中山」と「富士」を主題に詠んだ2首以外に歌を詠んだ形跡がないことが多くの文献に記されていました。なぜ2度目の旅が西行にとって歌を詠む心境になかったのか、以下に述べたいと思います。

文治2年(1186)、69歳の西行は39年ぶりに陸奥を目指して旅立ちます。目的は、平清盛の「さらば南都を攻めよや(「平家物語」)」の命令を受けた清盛の子重衡率いる軍勢によって焼失した東大寺(2階に逃れた千余人の僧侶が焼け死んだと「平家物語」にあります)の大仏の再建を目指す沙金勸進にありました。任命したのは大勸進職に任命された重源(ちょうげん)上人。東大寺の焼失は国民の心的象徴の喪失に等しく、再建はまさに国家事業でした。西行の目標は、当時国内で最も富を蓄えていた平泉の藤原秀衡の有している砂金450両の勸進ですが、秀衡と交渉できるのは、依藤太秀郷の流れをくむ西行(西行の家系は奥州3代の栄華を築いた藤原氏と祖先を同じくする鎌足以来の藤原氏の傍流)以外にいないことを見抜いた重源上人が、伊勢の二見ヶ浦の草庵を訪れて、西行を口説き落としとされています。

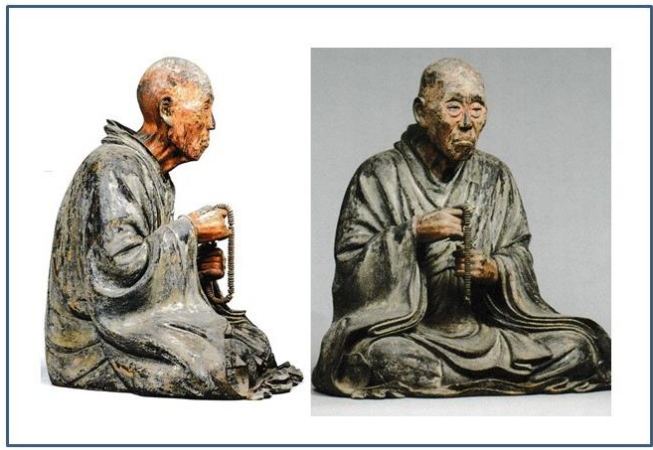


図3 日本の彫刻史上最も美しい老人像と言われる重源上人座像

目崎は、平家一門とかねてから浅からぬ関係をもっていた西行はその南都焼討の罪業に対して無関心たりえず、東大寺再興勸進によって平家の菩提を弔うことを本懐としたのではないかと述べています。2人の大物(源頼朝・藤原秀衡)を相手にする上での覚悟と駆け引きが必要で、当然そこに政治性が加わることとなります。この時、「東国に陰悪な空気が漂っていた」と言われたのは、頼朝の奥州藤原氏殲滅にかける異様なまでの執念であり、それを西行は嗅ぎとっていたはずです。事実、西行が秀衡と会い、都に帰った年の2月に義経が藤原秀衡を頼って落ちのびて来ますが、10月に秀衡が死去して2年後には後ろ盾をなくした義経が秀衡の後を継いだ泰衡によって、自刃に追い込まれます。そして、同年、頼朝の軍勢により泰衡が滅ぼされ、頼朝の野望が達成される訳ですが、そうした急テンポな出来事が起こる直前に西行と頼朝の顔合わせが行われた訳です。



図4 頼朝から贈呈された猫の置物を子どもに与える西行の図

「吾妻鑑」にあるように、西行が鶴岡八幡宮の中を歩いているのを偶然発見されたというのは史実ではなく、頼朝が参詣する8月15日の放生会を選んで八幡宮の近くを西行が計画的に歩いたというのが史実なようです。頼朝が喜んで西行を引見したのは、もともと歌道に深い関心があり、歌道の話を楽しみたい希望もあったと言えますが、頼朝が何より望んだのが西行の心得ている秀衡流兵法の故実の伝授であったと吾妻鑑にあります。頼朝との夜を徹しての談義を終えて西行は平泉を目指しますが、秀衡への折衝の結果、450両の砂金が寄進されることになり、老躯をひっさげての長途の勧進は達せられたこととなります。この頃すでに西行は数寄を断絶して仏道に徹しようとする境地に入りつつあったと言いますから、入滅を前に功德を積もうとする道心のあらわれと考えられています。それだけに与えられた使命に対する彼の緊張感は強く、歌を詠じる数寄の心境から離れていた様に思われます。詠んだことが確認されている2首の歌、「風になびく富士のけぶりの空に消えて 行方も知らぬわが思ひかな」も「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」も内容的には西行の覚悟を示す歌とされています。

以上記してきました「その1」「その2」から、「鳴立沢の歌」は初回の陸奥旅に於いて詠まれたと考えることが適切と思う訳です。

14-9 歌枕「鳴立沢」の成立時期について

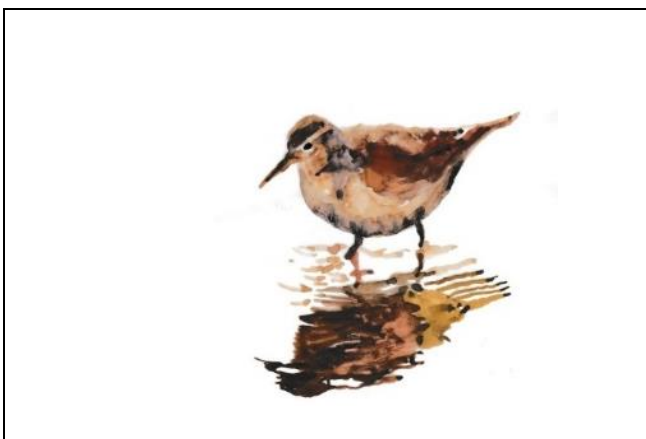


図3 枕詞としての「鳴」は「鳴立沢」よりも成立が古い

平安時代～鎌倉時代に詠まれた歌枕を国別に表した「諸国歌枕一覧（片桐洋一）」によれば、相模国の歌枕の地は、「足柄・小余綾磯（こゆるぎのいそ）・箱根山・二子山・見越崎（みこしのさき）・諸越里（もろこしのさと）」の6か所とありますので、

西行が訪れた当時、地名としての「鳴立沢」は存在しても歌枕としての「鳴立沢」は存在しなかったこととなります。14-4の例4, 6, 15にあるように、西行が「鳴立沢」を訪れたというのは現実的ではありません。

「広辞苑」によれば、歌枕とは、①歌を詠むときの典拠とすべき枕詞・名所など。また、それらを書き集め解説した書、②古歌に詠みこまれた諸国の名所とあります。そのため、「歌枕」の持つイメージから、塔婆が立ち並ぶ「死木立沢」と呼ばれていた場所が歌枕の地として存在していた可能性は殆どないと言えそうです。白洲正子が自伝の中で次のように述べています。

『歌枕というのは実に不思議なものである。外国でも故郷の地名を持ち歩く習慣はあるが、歌に詠まれた場所を、ときには全く架空の存在を、さも事実であるかの様に伝えるのは日本以外には無いと思う。たとえば「鳴立沢」のように、はじめは不特定の場所であったのが、西行物語では、相模の国大庭郡砥上原（今の鵜沼から藤沢のあたり）に設定され、ついで大磯に変わって現在に至っている。』 白洲正子「西行」

「鳴立沢」が歌枕の候補としてあがって来たのは、「西行物語」以降であり、定着したのは三千風以降と思われる。ただし、「鳴」という単語は「枕詞」として既に存在していたようで、古今・新古今和歌集の時代に「鳴」の羽掻きの方が歌学の知識としてはよほど「歌枕」として有名だったと歌枕の辞典にあります。

『新古今集の秋上の西行の歌「心なき身にもあはれは知られけり鳴立つ沢の秋の夕暮」はあまりにも有名だが、歌学の知識としては「鳴の羽掻き（はねがき）」の方がよほど有名であった。「古今集」恋五の「暁の鳴の羽（はね）がき百羽がき（ももはがき）君が来ぬ夜は我ぞ数かく」によって、夜明け方にくちばしで何度も羽毛をかく鳴の動作にたとえて、暁がたになっても男の来ない夜の回数を数える女の恨みを表す閨怨の歌の常套句となった。「心からしばしとつむものからに鳴の羽がきつらき今朝かな」（新古今集）「待ちわびて来ぬ夜むなく明けゆけば涙数そふ鳴のはねがき」（新後撰集）など例は多い。』片桐洋一「歌枕歌ことば辞典増補版」

14-10 さいごに

「願はくは花の下にて春死なんそのきさらぎの望月のころ」

と詠んだ通りに宿願を果たすという奇跡的な往生を遂げた西行の死はまたたく間に都の老若男女に大きな波紋を呼び、その後も勸進や唱導の聖たちが理想的往生人「西行上人」の話を地方に拡散させました。これに拍車をかけたのが没後 15 年に成立した「新古今和歌集」で、専制者・後鳥羽院によって陣頭指

「西行物語」「撰集抄」の力を借りて西行伝説が世に広まるにつれ、足跡を慕って廻国修行を志す者が現れます。時宗の開祖一遍が西行を一所不在の捨て聖、すなわち自分達と同様の遊行廻国の聖であったとして追慕したことや、時衆が西行伝説の各地への流布に大きく寄与したとされていますが、そういった史実の延長上に崇雪や三千風のような猛烈な西行追慕者が繋が



図5 西行伝承模式図

揮されました。西行歌 94 首の入集に加えて 15 年前に逝った一介の遁世者が、門地最高の慈円・良経、歌壇の巨匠俊成・定家・家隆、さらには治天の君の後鳥羽上皇さえも凌いで、荣誉ある筆頭歌人の地位を占めたことが衝撃となって西行伝説の形成の決定打となりました。

口から口へ、耳から耳へ波及した伝説は、やがて「西行物語」や「撰集抄」によって定着していきますが、そこには、唱導の台本として持ち歩いた時衆僧達の影響が大きかったと言います。唱導を効果的にするには物語を絵解きするのが最適なため、「西行物語」はおのずから絵巻物の形式になっていきます。また、殊勝な求道者西行法師のイメージが流布するにつれて、これをたくみに利用した仏教説話集「撰集抄」が出現しました。明治末に学者によって否定されるまで「撰集抄」は西行の著書として信じられてきましたが、観阿弥や世阿弥も例外ではなかったようで、「撰集抄」をヒントに能楽に於けるワキの役割として「諸国一見の僧」として西行を登場させています。実際に、室町時代の謡曲「阿漕（あこぎ）」「雨月」「江口」「西行桜」「実方」などでは、西行ないし西行的な僧がワキとして登場しています。



図6: 能「西行桜」

ってくるように思えます。

西行の存在無くして崇雪・三千風の登場はあり得ず、ふたりの存在無くして湘南発祥地を大磯とする道理もなかった訳ですから、今回は西行伝承と崇雪・三千風について論じてみたいと考えております。

◆2019,4,25

■補注

注 1:「廻国雑記」聖護院門跡准后道興 1487

「廻国雑記」は、道興という僧(正確には聖護院門跡准后道興)が文明 18 (1486) 年から翌年 3 月まで、北陸、関東、奥州諸国を遊歴した際に記した紀行文であるが、この中で大磯に立ち寄った時の記録として嶋立沢に触れている。

『嶋立沢：嶋たつ沢といふ所にいたりぬ。西行法師ここにて、心なき身にも哀れはしられけりと詠ぜしより、此の所はかくは名づけけるよし、里人の語り侍りければ、哀れし人の昔を思ひ出でて嶋たつ沢をなくなくそとふ』(廻国雑記による)

注 2:「群書類従」塙保己一 1793-1819

「群書類従」は、江戸時代に塙保己一が古書の散逸を危惧し

編纂した国文学・国史を主とする一大叢であるが、この中の大磯の部分で西行伝承に関する「廻国雑記」を取り上げている。

『大磯の宿といへる所は、古へ虎といひける好色の住みける所となむ。ある同行に戯れに申しきかせける、「今は又とらふすのべとあれにけり 人は昔の大磯の里」 嶋立つ沢といふ所にいたりぬ。西行法師ここにて、心なき身にもあはれはしられけりと詠ぜしより、此の所をかくは名づけるよし、里人の語り待りければ、あはれしる人の昔を思ひいでて嶋立つ沢をなくなくぞとふ』(群書類従による)

『西行の死後、その生涯を語るものは、早いもので鎌倉中期に成立した様であるが、必ずしも客観的な史実に基づくのではなく、仏教的イメージで理想化したものとしての西行像を語る一群の作品が生まれた。「西行物語」として一括しうるものがそれである。仏教者としての西行が非常に純粋に理想化されているのであるが、それもまた時代の人々が西行に求めたイメージの1つであったのだろう。伊藤嘉夫・久曾神昇編「西行全集」第2巻の目録によってみると、次のような作品群がある。西行物語絵詞(伝土佐経隆筆)・西行物語(文明12年本)・西行一生涯草紙・西行物語絵詞(海田采女本)・西行物語(木版本)・西行上人発心記。』渡部治「西行 / ひとと思想 140」

注3：能因法師

平安時代中期の僧侶・歌人。中古三十六歌仙の一人、大学に学び、文章生となるが、長和二年(1013)頃に出家し、摂津国に住む。諸国を旅し、奥州・伊予・美作などに足跡を残した。ことに陸奥旅行での作「都をば霞とともにたちしかど秋風そふく白河の関」は名高い。和歌六人党の指導的立場にあり、また源濟・藤原公任・大江嘉言・相模ら多くの歌人と交流をもった。自撰の家集『能因集』がある。著には他に私撰集『玄々集』、歌学書『能因歌枕』がある。

■引用図表

図3：俊乗房重源上人座像

- ・正面：日本の美仏 田中栄道 育鵬社 2017
- ・側面：和楽 小学館 2018.6.7号

図4：東海道名所図会復刻版下巻 太洋社 1999

図5：西行伝承模式図

花部英雄「西行はどのように作られたか」笠間書院 2016

図6：能「西行桜」大槻能楽堂HP

<http://www.nohkyogen.com/story/sa/saigyozaakura.html>

■引用文献・参考文献

- ・出家遁世 目崎徳衛 中公新書 1976
- ・西行の思想史的研究 目崎徳衛 吉川弘文館 1978
- ・西行の世界 山木幸一 塙書房 1979
- ・新古今和歌集/上 久保田淳 新潮社 1979
- ・人物叢書 180 西行 目崎徳衛 吉川弘文館 1980
- ・思想読本 西行 目崎徳衛編 法蔵館 1984
- ・西行の世界 久保田淳 日本放送協会 1988
- ・仏教文化選書 / 西行幻想 松永伍一 佼成出版社 1989
- ・仏教文化選書 西行幻想 松永伍一 佼成出版社 1989
- ・歌枕を学ぶ人のために 片桐洋一 世界思想社 1994
- ・西行を歩く 榎野尚一 PHP 研究所 1997
- ・西行 / ひとと思想 140 渡部治 清水書院 1998
- ・西行 白洲正子 新潮文庫 1999
- ・西行のすべて 佐藤和彦/樋口州男編 新人物往来社 1999
- ・西行と民間伝承/西行のすべて 小野一之 新人物往来社 1999
- ・歌枕 歌ことば辞典 増補版 片桐洋一 笠間書院 1999
- ・伊藤嘉一他編 大磯学 創森社 2013
- ・西行はどのように作られたのか 花部英雄 笠間書院 2016
- ・大磯嶋立庵の俳跡/史跡名勝天然記念物調査報国書第16輯 關水華 神奈川県教育委員会事務局社会教育課 1950
- ・大磯町文化史 大磯町文化史編纂委員会 1956
- ・大磯 大磯町役場 1968
- ・大磯ふるさと紀行 高橋光 郷土史研究会 1981
- ・大磯歴史物語 池田弥三郎 グロリア出版 1981
- ・ふるさと大磯 高橋光 郷土史研究会 1983
- ・藤沢文庫9 藤沢史跡めぐり 藤沢文庫刊行会 1985
- ・ふるさと大磯探訪 高橋光 郷土史研究会 1991
- ・西行伝説 / わが住む里第49号 出張千秋 藤沢市総合市民図書館 2000

